

# 文化

## ザ・タイガースにみる「和解」の物語

国際日本文化研究  
センター准教授

磯前 順一

フォーラム京



1960年代に人気を集めたザ・タイガース—写真提供・明星



いそまえ・じゅんいち 1961年茨城県生まれ。東京大文学博士。専門は宗教・歴史研究。著書に「喪失とフスタルシア」など。

### 時代映す5人の友情と葛藤

9月8日の東京国際フォーラムから始まった沢田研二のツアーに、瞳みのる、岸部一徳、森本太郎が全曲演奏に参加し、加橋かつみを除く「ザ・タイガース」の元メンバーの4人が顔をそろえた。ツアーは約半年間、全国38カ所に及ぶ大規模なものとなったが、すでにほとんどの会場のチケットは売り切れている。これほど人気を呼んでいる一番の理由は、40年ぶりに公の前に姿を現した瞳と、沢田をはじめとする3人のメンバーの再会であろう。

京都で5人の若者によって結成されたタイガースは、東京の大手プロダクションに見いだされ、1968年に頂点を迎えるグループサウンズ・ブームの寵児となる。「モナリザの微笑み」「花の首飾り」といったエレキ音楽とクラシック音楽を融合させた佳曲の数々が、高度成長期にあった日本の若者の心を捉えた瞬間であった。

しかし、順風満帆に見えた彼らの活躍も、加橋の脱退によって陰りが差す。加橋の脱退は、タイガースをアイドルに仕立てようとする所属プロダクションの方針を拒絶したのもだった。加橋に続いてこの芸能人路線に反旗を翻したのが瞳であるに至り、最終的には瞳の強い意向によって7年にタイガースは解散する。

80年代に入り、タイガースは加橋を含むメンバー5人によって再結成され、大きな反響を呼ぶ。しかし、依然として瞳だけは姿を現すことはなかった。その潔さが強烈な印象を与える一方で、メンバーの間にはまだ癒やされない深い傷が残っている現実を突き付けるものとなった。

それが、今回の瞳の復帰によって、彼と他のメンバーとの和解がもたらされた。多くの同世代が今回のツアーに熱狂したのは、もう若いとは言えない自分たちの人生に、かつての青春の輝きを取り戻させるこの「和解」の物語が魅力的なものであったからであろう。

はぐれた加橋

しかし、加橋が自らの意志でそこにはいないことをまはつきり意識せざるをえない。今回の再結成からほどない時期に、加橋のソロ・コンサートがひっそりと開かれ、加橋はひとりタイガースの楽曲を弾み備えたギター演奏とともに歌ってみせた。彼もまた、仲間たちからはぐれているにせよ、今もなおタイガースの一員なのだ。この容易に和解に至らない未完の物語こそが、彼らが互いに譲ることのできない真摯な人生を、その苦澁を含めて、解散後送ってきたことの何よりの証しでもある。

メンバーは、今回のツアーでは参加しなかった加橋の心中を思いやっ、ザ・タイガースと名乗ることをしなかった。まさに、この5人をめぐる友情と葛藤の物語こそが魅力なのだ。

来年度から国際日本文化研究センター(京都市西京区)では、ポピュラー音楽の研究プロジェクトとして、彼らの人気の秘密を65年のグループ結成時から解散に至る軌跡をたどりながら解き明かしてみたいと考えている。葛藤を乗り越えて、年齢を重ねた今ならではの演奏のハーモニーを5人そろって聴かせてくれる日は来るのだろうか。想いを残しながらも別離

9月8日の東京国際フォーラムから始まった沢田研二のツアーに、瞳みのる、岸部一徳、森本太郎が全曲演奏に参加し、加橋かつみを除く「ザ・タイガース」の元メンバーの4人が顔をそろえた。ツアーは約半年間、全国38カ所に及ぶ大規模なものとなったが、すでにほとんどの会場のチケットは売り切れている。これほど人気を呼んでいる一番の理由は、40年ぶりに公の前に姿を現した瞳と、沢田をはじめとする3人のメンバーの再会であろう。

京都で5人の若者によって結成されたタイガースは、東京の大手プロダクションに見いだされ、1968年に頂点を迎えるグループサウンズ・ブームの寵児となる。「モナリザの微笑み」「花の首飾り」といったエレキ音楽とクラシック音楽を融合させた佳曲の数々が、高度成長期にあった日本の若者の心を捉えた瞬間であった。

しかし、順風満帆に見えた彼らの活躍も、加橋の脱退によって陰りが差す。加橋の脱退は、タイガースをアイドルに仕立てようとする所属プロダクションの方針を拒絶したのもだった。加橋に続いてこの芸能人路線に反旗を翻したのが瞳であるに至り、最終的には瞳の強い意向によって7年にタイガースは解散する。

80年代に入り、タイガースは加橋を含むメンバー5人によって再結成され、大きな反響を呼ぶ。しかし、依然として瞳だけは姿を現すことはなかった。その潔さが強烈な印象を与える一方で、メンバーの間にはまだ癒やされない深い傷が残っている現実を突き付けるものとなった。

それが、今回の瞳の復帰によって、彼と他のメンバーとの和解がもたらされた。多くの同世代が今回のツアーに熱狂したのは、もう若いとは言えない自分たちの人生に、かつての青春の輝きを取り戻させるこの「和解」の物語が魅力的なものであったからであろう。

はぐれた加橋

しかし、加橋が自らの意志でそこにはいないことをまはつきり意識せざるをえない。今回の再結成からほどない時期に、加橋のソロ・コンサートがひっそりと開かれ、加橋はひとりタイガースの楽曲を弾み備えたギター演奏とともに歌ってみせた。彼もまた、仲間たちからはぐれているにせよ、今もなおタイガースの一員なのだ。この容易に和解に至らない未完の物語こそが、彼らが互いに譲ることのできない真摯な人生を、その苦澁を含めて、解散後送ってきたことの何よりの証しでもある。

メンバーは、今回のツアーでは参加しなかった加橋の心中を思いやっ、ザ・タイガースと名乗ることをしなかった。まさに、この5人をめぐる友情と葛藤の物語こそが魅力なのだ。

来年度から国際日本文化研究センター(京都市西京区)では、ポピュラー音楽の研究プロジェクトとして、彼らの人気の秘密を65年のグループ結成時から解散に至る軌跡をたどりながら解き明かしてみたいと考えている。葛藤を乗り越えて、年齢を重ねた今ならではの演奏のハーモニーを5人そろって聴かせてくれる日は来るのだろうか。想いを残しながらも別離